

インド密教とマンダラ

大正大学講師・真言宗豊山派南蔵院住職
野口圭也

第2回 インド密教の基本的特色

はじめに

今回は、マンダラを作り出したインド密教思想の基本的な特色を取り上げます。インド密教は仏教以外のインド伝統派の思想や、土着信仰の要素を取り入れながら発展をしてゆきました。その意味では、極めて「インド的」な性格が強い宗教と言えますが、同時に自分らの立場が大乗仏教であることを常に確認する努力もしていました。

密教思想を単にインド伝統思想であるウパニシャッドの思想への回帰ととらえたり、あるいは逆にインド仏教思想の最終完成形とみなす見解は、いずれも極端に過ぎるであろうと思います。恐らく密教独自の実践法がまず初めにあり、それを採用したことによって、今度は実践法を正当化する教理が必要となっていく、という流れがインド密教思想の根底にあるのではないかと私は考えています。

Ⅱ-1. 密教の背景にあるインド思想

(1)ヴェーダの聖句と祭式

紀元前1200～1000年に成立したヴェーダ聖典の聖句をマントラ (mantra) と言います。これは仏教において「真言」と漢訳されました。真実のことばは神をも従わせる強い力を持つ、という信仰は古くヴェーダ聖典に起源があります。ヴェーダの祭式で、

火によって神々に供物を捧げる儀式をホーマと言いました。これが密教に入ると護摩ごまとなりました。「護摩」は「ホーマ (homa)」の音を写したことばです。

(2)ウパニシャッドの梵我一如の思想

紀元前500年頃に成立した哲学書であるウパニシャッドでは、自己の本質 (アートマン) と宇宙の根本原理 (梵 ブラフマン) とが、根源においては同一である、自分という存在は根本原理の現れに他ならない、という思想が説かれています。それはウパニシャッド文献に「我は梵なり」「汝は《それ》なり」と述べられています。

しかし自己の本質も根本原理も、これこれしかじかのものである、と言葉で定義づけることは実は不可能です。真理は言葉の表現領域を超越しているからです。インド思想における真理とは、二元性が完全に超越された状態にあります。仮に「真理とは○である」と述べたとすると、○以外のものを排除することになりますから、この言明は既に二元性に陥っており、真理を表すものではありません。したがって真理を言語で表現するには「○ではない、△ではない」という表現を用いざるを得ないことになります。ウパニシャッドでは、アートマンを言い表すのに「《非ず、非ず》のアートマン」と述べています。

(3)ヨーガの実修

真理を実現する手段としてインド伝統派でも仏教でも実修されていたのが、ヨーガ

という精神集中の実践法です。ヨーガはインドにおいて非常に古い歴史を持ち、インダス文明まで遡るといふ説もあります。古典ヨーガとハタ・ヨーガがありますが、だいぶ性格が違います。古典ヨーガは伝統的な実践法で、いわば心の表面の大波を抑えることを意図します。心の働きが完全に静まりかえった状態になるよう、怒りや欲情など激しい感情を抑制し、心を一点に集中します。

これに対しハタ・ヨーガは8～9世紀ころから登場し、13世紀に大成された新しいヨーガです。これはひと言で言えば、擬似生理学的行法を用いて、古典ヨーガとは逆に行者の身心エネルギーを最大限に活性化させる実践法です。「ハタ (haṭha)」ということばは「暴力・力」という意味ですので、そのニュアンスが理解できるかも知れません。身体の中にプラーナという生命エネルギーの通管（ナーディー）や、その結節点であるチャクラを想定し、行者は意識して生命エネルギーを循環させます。ちょうど後期密教が成立するのと同じ時期に現れ、『ヘーヴァジュラタントラ』などの後期密教経典に取り入れられました。

II-2. (後期)インド密教のいくつかの特徴

インド密教思想にはいくつかの極めて特異な特徴があります。それは後期密教において殊に顕著になりますが、実際にはインド密教そのものが本質的に保有している根本理念です。(4)の「性的ヨーガの導入」の項目を除いては、中期までの密教と後期密教の差は、程度の違いに過ぎません。

(1) 現生成就

現在の生存期間中に悟りを得ることができる。

秘密集会に専心する菩薩は、今生において(=ただ今現在の生存期間中に ihaiva janmani)、一切如来の中で仏陀の数に入ることができる。[秘密集会タントラ 109]

一切の分別を離れた者は、他ならぬ現在生において成就^{じょうじゆ}する。[智慧成就 I -56cd]

(2) 象徴万能主義：象徴を用いた儀礼に悟りを得るための有効性を認める。

① 真理は象徴（象徴物・象徴言語・象徴動作）によって表現される。

② 「象徴するものと象徴されるものは同一である」[津田真一『反密教学』,リポート,1987,p.326. repr.春秋社,2008,p.376]

③ 「自己が絶対者と相似ならば自己は絶対者と同一である」「自己の構造を象徴操作を通じて絶対者と相似なる状態に再構成し得たとき、自己は絶対者と合一^{ヨーガ}した状態にある」[津田真一前掲書, pp.216-217, pp.266-267]

(3) 解脱^{げだつ}至上主義：解脱という究極の目的のためには、あらゆる手段が正当化される。

① 五蘊^{ごうん}などのすべての事物は、みな清浄である。

色形などの対象も他の物も、ヨーガ行者にとっては輝いている。それらすべては清浄を〔本来の〕性質としている。なぜなら、世間のものはブッダからなるからである。[ヘーヴァジュラタントラ I -ix- 4]

② 従って、いかなる実践手段をとっても修行者の清浄性は失われない。

およそ世間の人々が束縛される、そういう〔色形などの世俗の事物〕により束縛を解き放つ。世間の人々は迷乱し、真実を知らない。真実と離れている者は成就を得

ないだろう。[ヘーヴァジュラタントラ I -ix-19]

(4)性的ヨーガの導入：上記(1)から(3)を根拠として、後期インド密教においては、男性と女性の性的ヨーガの状態が、そのまま悟り(菩提)^{ぼだい}を表すことになる。

まず女性が智慧であるべし。方便は男性と伝えられている。[ヘーヴァジュラタントラ I -viii-28ab]

従って、(生身の女性+生身の男性) = (智慧+方便) = (空性+大悲) = 菩提、ということが必然的に導き出されることとなります。チベット密教で見られる男女尊の合体像は、後期密教のこのような教理に基づいて造形されており、菩提そのものを男女合体像という形態によって表した象徴表現です。

しばしば、性行為の快樂の状態を悟りの境地のアナロジーとした、という説明がありますが、それは少し違います。快樂の状態をアナロジーとしたのではなく、上に述べた通り「象徴するものと象徴されるものは同一である」のですから、性行為それ自体が悟りを表しているのです。

(5)師の絶対性：手段の有効性を実証し保証するのは師のみ。

(6)秘密保持：師に帰依し灌頂^{かんじょう}を受けた者のみに秘密の教えが明らかにされる。

師を敬わず、未熟の者に秘密を説いた者は、「決して成就はないだろう。苦の集まりである魔が取り付くだらう。また、彼は地獄に行き恐ろしい様々な苦痛を受けるのである」(『根本罪』)

この(5)(6)によって、師匠と弟子によって構成される信仰グループ内では師が絶対的な権威として君臨することになります。師匠はその行法によって成就(宗教的完成と超能力の獲得の意味があります)を得たことになっています。弟子の修行の進展の度合いを判断することができるのは師匠だけです。師のことばを疑うことは許されませんし、教えの内容が適正か否かの判断を他の人に仰ぐこともできません。

これらの特徴を持つ宗教団体は、自己完結したある意味で無敵の組織となります。自分たちだけが悟りに到達することができ、それは絶対的存在である師匠によって保証されています。しかしこの悟りは、実は自分たちだけに通用する、仲間内の悟りに過ぎないのではないのでしょうか。